

公益の風 #59



東北公益文科大学大学院 修士課程 修了生

石川 明

皆さんが抱くお城のイメージとはどのようなものでしょうか。きつと、姫路城のような壮大なお城を思い浮かべた方が多いのではないのでしょうか。しかし、そのようなお城はほとんど残されておらず、戊辰戦争以降お城は取り壊され、城跡は公園になったり、市役所などの公共施設が立ち並んでいます。しかしながら、近年、お城を復元して、観光振興や地域活性化に役立てようとする動きが各地で起こっています。復元することによって地域の歴史や文化に興味を持ってもらい、少子高齢化やコミュニティの希薄化で失われていくその土地ならではのアイ

地域をよみがえらせる城郭の力 ～鶴ヶ岡城活用の可能性～

デンティティを後世につなげる取り組みの一つにもなっています。

全国のお城の数は2万とも3万とも言われており、正確な数字はわかりませんが、必ず皆さんが住んでいる地域にも、「城山」や「館跡」などの地名が残されているはず。その場所にはかつてその土地を治めていた領主がおり、壮大な天守をもつ城はなかったかもしれないが、なにかしらお城のようなものがあつたことに間違いはありません。このように、お城は地方の小さな町であつても、必ずどこかにあると言っているほど多く存在しています。

私は大学院で、このようなまだ取り上げられていないお城を復元し、地域活性化に結びつけるためにどのようなようにしたらよいかについて研究を行ってきました。偶然にも公益文科大学大学院の目の前は鶴岡公園であり、かつてそこは「鶴ヶ岡城」と呼ばれていたお城でもあります。初詣や花見に訪れる鶴岡公園を、お城だと思っている人は少ないかもしれませんが、お城としての機能と同時に、経済とまちづくりの中心として築かれた近世城郭としては、かなり大きなお城です。現在は、お城の中心部分に荘内神社が建立されています

が、もともとは本丸御殿が建てられており、天守はなく、その代わりに御角櫓と呼ばれる二階建ての櫓があつたとされています。

しかし、私が収集した史料の中には、「天守」と書かれた図面のようなものが存在しています。それは三階建てであり、今までの定説にはないものです。江戸末期に発行された「東講商人鑑」と呼ばれる、当時の商人を対象としたガイドブックにも、三階建ての天守のようなものが描かれています。あらためて鶴岡公園にある荘内神社の拝殿を見に行くと、何かに似ていることに気づきます。形状も菅原道真公を祀る鶴岡天満宮のような神社とは、屋根の形、装飾が明らかに違っています。

ここからは私の推測ですが、鶴ヶ岡城は明治9年に取り壊され、荘内神社は翌年に建立されています。当時は建設重機もありませんので、解体も建設もすべて手作業で行っていました。その際、お城をすべて更地にし、再度、その場所に神社を建設するのは大変な作業だつたと思われま

す。お城に使われていた部材には、質の良いものも沢山あつたに違いありません。それならば、その場に残されている建物

や木材を、再利用しようと考えたのではないのでしょうか。あるいは、あえてお城の建物を流用し、後世へ残そうとしたのかもかもしれません。そうした視点から見ると、荘内神社の拝殿は天守の最上階部分によく似ています。建物に対して屋根が大きく感じるのは、天守最上階には不可欠な展望スペースと手すり部分を覆うためであるならば納得がいきます。

さらに、私が収集した史料に描かれている御角櫓の屋根装飾と、荘内神社拝殿の装飾が、ほぼ一致していました。これ以上のことは、2年間という短い大学院生活では明らかにすることはできませんでしたが、もしこれらの事実がつかげれば、かつてのお城の建物は、現代においても姿を変えながら神社の一部として使われ続けていることになりそうです。それは、地域の歴史としてはもちろんのこと、観光資源としても大変魅力的なことです。

このようにお城は、現代社会においてもその価値を活かすことで、地域社会へと貢献する可能性をもっています。そのような観点から、お城に限らず、皆さんの身近にある史跡についても、再度、目を向けてみてはいかがでしょうか。